

## 序

奈良国立文化財研究所は、1959年以降、継続して平城宮跡で発掘調査を実施してきました。この宮域内の発掘調査は、一定の計画のもとに実施しているものです。これまでに調査を完了した部分は、全宮域のほぼ30パーセント、これによって、多くの事実を解明し、また、新たに多くの問題を提示することができました。

この宮域内の計画的な発掘調査にあわせて、宮域外になる平城京の街区域の発掘調査も断続的に担当しています。その発掘調査のほとんどは、各種の建設土木工事などの予定地を工事の事前に発掘する、いわゆる緊急調査であり、それを奈良県や奈良市の調査組織と分担しているのです。今回報告する平城京左京七条一坊十六坪を中心とし、一部がその十五坪にわたるほぼ1.4ヘクタールの地域の発掘調査もまた、大型小売店舗建設予定地における緊急調査であり、1994年から95年にかけて実施したものでした。

左京七条一坊は、平城宮から南へ2キロメートルほど離れた、平城京南半部の朱雀大路に面した街区にあたります。これまでの街区域における発掘調査の成果からすると、調査にのぞむにあたって、いくつかの問題が浮かんでいました。このあたりは一般的な住宅地域なのか。住宅ではなく、都の特別な施設があった地域か。住宅があったとすれば、その宅地はどの程度の広さを占め、どのような建物がどのように配置されているのか。推定できる居住者はどのような身分の人物か。さらに、街区を区画する街路は、このあたりではどうなっているのか。問題は多岐にわたります。

もちろん今回の一度の発掘調査ですべての問題が解決できるとはかぎりません。しかし、従来の調査成果とあわせ考えると、今回の調査によっても、街路と街区の規模と構造、住宅とそれ以外の特別な施設との交代の状況、平城京終末前後の街区の利用状況など、平城京の実態を解明し、さらに新たな問題を提起する資料を得ることができました。

これまでの平城京の街区域の発掘調査の成果をかえりみますと、奈良時代史の考究にとって、平城宮跡における発掘調査とならんで、それらの調査がいかに重要なものであったか、それを強く感じるとともに、この報告書がその意義をご理解いただく一助になることを願っています。今回の調査を含めてこれまでの発掘調査における関係各位のご協力に深く感謝申し上げます。

1997年3月

奈良国立文化財研究所長

田 中 琢